

2017年度第2回 市島邸企画展示

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランブシェードの世界～

会期	平成29年9月30日（土）～平成29年11月30日（木）
休館日	毎週水曜日（祝日の場合は翌日休館）
開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料	[個人] 大人 600円 小・中学生 300円 [団体]（20名以上） 大人 540円 小・中学生 250円
ギャラリートーク	平成29年9月30日（土） 午前の部 午前10時～ 午後の部 午後2時～ 藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館担当課長）による作品解説
市島邸ナイトツアー	平成29年11月19日（日）午後5時～ 藤原秀之氏による作品解説及び邸内ガイド

主 催/ 新発田市 協 力/ 早稲田大学図書館
お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

<市島邸2017年度第2回企画展>

文明開化の明かりと暮らし

～市島邸ランプシェードの世界～

今日の人々の暮らしは、昼夜の別なく明かりに満たされています。ただ、そうした暮らしも実は明治時代以降、わずか100年余の間に広まったものだという事を、つい忘れがちではないでしょうか。ここ天王の地に電灯がひかれたのも、今から約100年前の1915年（大正4）のことだと言われています。

今回は、市島邸に残る資料の中から、人々の暮らしを照らしてきたさまざまな「明かり（照明器具）」にスポットをあて、その歴史を振り返ってみたいと思います。

江戸時代の蝋燭や行灯から、明治になり石油ランプ、ガス灯、さらには電灯へと時代は移ってゆきます。

市島邸にはそんな時代の移り変わりを実感できる資料が多数残されています。たとえば、庭には10数基の石灯籠が設置され、邸内を歩くとちょっと変わった形の電灯の笠（ランプシェード）があることに気づきます。これらのランプシェードはいずれも市島宗家9代・市島徳厚の時代から使われています。祖父・静月の時代に建てられ、父・湖月が発展させた市島邸に電気の明かりが灯ったのは、天王の地に電灯設備が設置されるようになった1915年頃だったと思われます。1917年に亡くなった湖月をはじめとして、市島邸に集う人々の目に電気の明かりはどれほどまぶしく輝いていたことでしょうか。

皆さんも邸内を巡り、さまざまな「明かり」を探しながら、市島宗家歴代の思いに触れてみてください。

2017年9月

市島邸

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～

出陳リスト

1	市島家現金出納簿 大正四年 1冊 紙本墨書 1915年
2	市島家現金出納簿 大正五年 1冊 紙本墨書 1916年
3	市島家内事部出納明細帳 大正十四-昭和二年 1冊 1925—1927年
4	海外雑誌の広告から 1926年ころ Scrap your candles!"Homes and Gardens" August, 1926 To shine in the night!"House and Garden" December, 1926 Nine steps in making a silk shade"House and Garden" October, 1931
5	東京銀座通電気灯建設之図(パネル) 3枚続 歌川重清画 1883年(明治16) (原本:早稲田大学図書館所蔵)
6	道頓堀芝居前夜之景(パネル) 林基春画 1895年(明治28) (原本:早稲田大学図書館所蔵)
7	明治初め頃の街灯『ファーサリ写真帖』より(原本:早稲田大学図書館所蔵) BENTEN DORI YOKOHAMA (横浜弁天通) BUND, KOBE (神戸海岸通)
8	丸提灯 4点
9	箱提灯 2点
10	輪灯・瓔珞 1組
11	六角釣灯籠 1点
12	黒塗菊形燭台 2点
13	皆朱丸形行灯台 4点
14	鶴亀燭台 1点
15	秉燭 12点
16	手燭 1点
17	雪洞手燭 2点
18	有明行灯 1点
19	テーブルランプ 2点
20	ランプシェード 6点

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～

○「電気」の明かり

世界で初めて電気の明かり（電灯）が点灯されたのは1808年のことだと言われています。当初「アーク灯」と呼ばれる主に炭素棒の電極を用いた電灯は、1876年にパリで街灯として採用されました。

日本では1878年（明治11）、工部学校（現・東京大学工学部）のホールでアーク灯が点灯され、1882年、東京銀座の大倉組で初めて一般公開されたのもアーク灯でした。アーク灯は、その後映写機や探照灯に用いられましたが、家庭用照明には不向きだったようです。1879年、炭素線を発光部分（フィラメント）に用いた白熱灯を発案したエジソンは、フィラメントに日本の竹をもちいた電球の生産を開始、その柔らかな光は屋内の照明器具に徐々に普及してゆきます。日本でも1889年には電球の製作に成功、電灯会社も東京、大阪、京都、名古屋と各地に設立され、電灯が普及してゆくこととなります。

新潟に電灯会社が設立されたのは1897年（明治30）のことでした。さらにフィラメントにタングステンを用いた電球が発明されると光度も上がり、その頃の新聞を見ると「眼の為に可い光＝電気灯が一番可い」として「日々我等が用ふる蠟燭、洋灯（らんぷ）、電灯、瓦斯等の光の中で、眼の為に何れが一番可いかと云ふ事は中々注意すべき事」で「米国の学者が研究した所に依れば、電灯の光が、多くの灯光の中で一番良い」との説を挙げています（『東京朝日新聞』1913年1月14日）。

そんな電灯が天王の地に導入されたのは1915年、市島邸もほどなく電気の明かりに満たされたのでした。



文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～

○市島邸の明かり

1877年に天王の地に新たな居を定めた市島家、当初は当然「火」の明かりを用いていました。当時の暮らしを象徴する行灯や燭台が今日も残されています。特に巨大な丸提灯や箱提灯は市島家における冠婚葬祭、さらには周辺地域の祭礼などで使用されたものではないかと思われます。そしてそんな市島家にも電気の時代がやってきます。そもそも湖月時代から電力、電灯への関心を持っていたとも言われますが、実際に電灯が導入されたのはその晩年、1916年頃のことでした。家の周りに電柱が立ち、電線が張り巡らされ、そして邸内にはさまざまな形のランプシェードが吊るされました。現在、邸内には30を超えるランプシェードが残り、そのほとんどが現役のものとして邸内を照らしています。



文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～



1. 市島家現金出納簿 大正四年 1冊 紙本墨書 1915年

市島家における1年間の現金出納について各項目を1行書で簡潔にまとめたもの。原則として日付順、上段に支出(出金額)、下段に収入(納金額)が記入されている。そのうち11月9日に「電線及電灯用薬品代」として6円40銭を支出しており、このころから市島邸でも電灯設置の準備が始まっている。12月18日に「地形電灯料」として11円余を「水会社(新潟水電会社)」に支払い、12月20日は反対に「電柱敷地料」5円を受け取っていることから、周辺地域に電気の供給が始まりつつあったことがわかる。



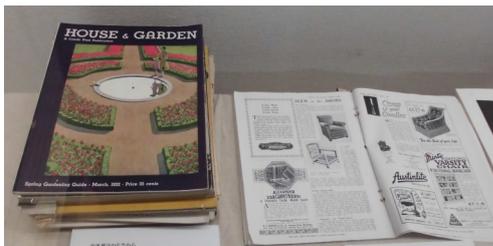
2. 市島家現金出納簿 大正五年 1冊 紙本墨書 1916年

前年12月末からこの年の1月にかけて、市島邸では「電工夫」を雇って邸内の工事をおこなっており、5月29日に新潟水電会社に対し「電灯器具代」484円76銭を支払っている。電灯設備が整い、邸内が電気の明かりに満たされたのは、おそらくこのころであったと推測される。



3. 市島家内事部出納明細帳 大正十四-昭和二年 1冊
1925-1927年

内事部は当時の市島家で内政全般を担当していた部署。他に会計部、土地部、東京事務所などがあった。1925年6月の出納明細を見ると、「電気料 蠟 油費」として、それぞれ支出されている。他の月を見ても、電気料と蠟燭、油代がともに記載されていることから、電灯が設置された市島家で、蠟燭や油を使った明かりが並行して使われていたことがわかる。



4. 海外雑誌の広告から 1926年頃

- ・Scrap your candles!“Homes and Gardens” August, 1926
- ・To shine in the night!“House and Garden” December, 1926
- ・Nine steps in making a silk shade“House and Garden” October, 1931

多趣味であった徳厚は、国内外のさまざまな分野、内容の雑誌を定期購読していたようで、中には海外の住宅、ガーデニング関係の雑誌も含まれていた。それらを見ると、この頃の欧米では、電灯はもちろん多くの電化製品が家庭に入り込んできていた様子がうかがえる。

○Scrap your candles! “Homes and Gardens” August, 1926

イギリスの電気会社の広告。「まだ電気を使ってないなんてもったいない! 格安で電灯のある生活を提供します!」とばかりに自社製品を売り込んでいる。

○To shine in the night! “House and Garden” December, 1926

イギリスの雑誌に掲載された明るい夜を演出するさまざまなランプシェードの紹介記事。

○Nine steps in making a silk shade “House and Garden” October, 1931

こちらは自分でシルク製のランプシェードを作ってみようという記事。

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランブシェードの世界～



5. 東京銀座通電気灯建設之図 (パネル) 3枚続
歌川重清画 1883年 (明治16)

前年 (1882年) 11月1日、日本で初めて電気の光が多くの人々の目の前で点灯した。場所は東京銀座2丁目、東京電灯会社 (現・東京電力) 設立にかかわった大倉組 (大倉喜八郎: 新発田出身) の前で、これはその時の様子を描いた錦絵である。電極に炭素棒を用いた「炭素アーク灯」と呼ばれる電灯で、2000燭光 (1燭光=1ワット強とされる) の明るさがあったという。

<中央上部の解説文>

電気灯ハ米国人ノ新發明ニシテ他ノ火ヲ点スルニ非スシテエレキ器械ヲ以テ火ヲ發シ其光明數十町ノ遠キニ達シ、恰モ白昼ノ如シ、実ニ日月ヲ除クノ外、之ト光ヲ同スルモナシ

(原本: 早稲田大学図書館蔵)

<画像は同館古典籍総合データベースより転載>



6. 道頓堀芝居前夜之景 (パネル) 林基春画
1895年 (明治28)

東京に後れること約5年、大阪にも電灯会社が設立されることとなった。それから数年、道頓堀の芝居小屋の前には電柱が立ち並び、街灯が往来する多くの人々を照らしている。

(原本: 早稲田大学図書館蔵)

<画像は同館古典籍総合データベースより転載>



7. 明治初め頃の街灯 BUND, KOBE (神戸海岸通)

開国とともに各地の外国人居留地を中心に、ガス灯が設置されるようになる。これはその頃の横浜と神戸の様子を撮影したものの。特に横浜では軒下に吊るされた大量の提灯とともに、ガス灯が設置されているのがわかり、時代の移り変わりを象徴的に捉えた1枚となっている。

『ファーサリ写真帖』 (早稲田大学図書館蔵) より

<画像は同館古典籍総合データベースより転載>



7. 明治初め頃の街灯
BENTEN DORI YOKOHAMA (横浜弁天通)

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～



8. 丸提灯 4点

桜紋が描かれた大中小3種の丸型提灯は須佐之男神社（天王神社）の天王祭で使われたものか。



9. 箱提灯 2点

市島家の木瓜紋を白く染め抜いた箱提灯の用途も不明だが、その大きさには目を奪われる。



10. 輪灯・瓔珞 1組

仏前に灯を献ずるための器具である輪灯は、宗派によって形状が異なるが、特に真宗大谷派は本体に真鍮製の丸い輪と笠をつけただけの簡素なものを用いる。瓔珞は荘厳具の一つで、輪灯の装飾品として共に用いられる。

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～



1 1. 六角釣灯籠 1点

銅製で扉以外の4面に唐草文を透彫し、火袋の上下には雲、波を描く。さらに裏面に線刻を施した12枚の蓮弁を笠としている。釣灯籠は寺社の回廊や仏壇の照明具などに用いられ、市島邸でも南山亭の仏間に同種のものがある。ただ、この一基は別に保存されていたもので、用途は未詳である。



1 2. 黒塗菊形燭台 2点

説教所で日常的に使用されている燭台。燭台から台座まで一連の木製黒塗で、下部の台座が菊花状をしていることから、菊灯とも呼ばれる。



1 3. 皆朱丸形行灯台 4点

全体に朱漆を塗り、中段に銅製の燭台を設置した「行灯台」。行灯と言っても周囲を和紙で覆うことなく、燭台部分が見える形状となっている。現在ではその役目を終え、通常は専用の箱で市島邸の蔵に保管されている。



1 4. 鶴亀燭台 1点

南山亭仏間で使用されている銅製の燭台。



1 5. 乗燭（ひょうそく） 12点

小皿に油を入れ、灯心を浸して火を灯すものを総称して乗燭（「へいしょく」とも）といい、特に中央に灯心を立てるための突起がついたものを「たんころ」とも呼ぶ。そのまま照明器具とすることもあるが、主に行灯の火袋に入れて使われた。市島邸にはたんころ型のもも含め、十数個が保管されている。

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～



16. 手燭 1点

夜の茶会（夜咄）など、夜間の移動の際に使用した柄のついた燭台。装飾を排した実用的な形状のものである。



17. 雪洞手燭 2点



18. 有明行灯 1点

側面をわずかにくり抜いた箱蓋をかぶせることで光量を調節し、主に夜間の照明用として枕元に置いて用いられた。三日月、満月（円形）にくり抜くものが多いが、これは瓢箪型にくり抜かれており、格別の風情がある。



19. テーブルランプ 2点

白熱灯を用いたと思われるテーブルランプ。台座部分が別に展示した燭台と同じく「菊形」となっており、光源がかわっても伝統的な形状が継承されていることがわかる。



20. ランプシェード 6点

邸内で使用されているものと同時期のものと思われるガラス製ランプシェード。明治時代の後期にはこうしたシェードを作成する技法が日本でも行われていたというが、本資料が国産かどうかは未詳である。

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～

○市島邸のランプシェード

邸内を巡ると、各部屋を明るく照らす電灯にさまざまな形の笠、「ランプシェード」が取り付けられているのがわかります。これらのランプシェードは市島邸に電灯が導入された1916年頃に取り付けられたものと思われませんが、だとすれば100年の長きにわたり、市島邸を照らしてきたこととなります。さまざまな文化財に溢れた市島邸ですが、どれ一つとして同じ形のものがないと言ってよいくらいバラエティに富んだランプシェードに注目して（点灯中はあまり見つめると目が痛くなりますのでご注意ください）邸内を巡ってみてください。

①渡り廊下入口 	②新座敷 	③水月庵内手前部屋 	④水月庵内奥部屋 	⑤主人玄関外側 
⑥主人玄関内側 	⑦帳場木戸入口 	⑧番頭部屋 	⑨番頭部屋脇入口 	⑩廊下展示ケース前 
⑪被災美術品展示ケース奥 	⑫離れ座敷（10畳部屋） 	⑬離れ座敷（4.5畳部屋） 	⑭離れ座敷（3畳部屋） 	⑮南山亭入口 
⑯南山亭仏壇前（中庭側） 	⑰南山亭仏壇前（仏間側） 	⑱南山亭書院（中庭側） 	⑲南山亭書院（床の間側） 	⑳南山亭上居間（中庭側） 
㉑南山亭上居間（内側） 	㉒南山亭下居間（中庭側） 	㉓南山亭下居間（ケース側） 	㉔主人部屋 	㉕納戸 
㉖説教所 				

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランブシェードの世界～

○市島邸の石灯籠

市島邸の大きな見どころの一つに庭園があります。庭園にはさまざまな木々が生い茂り、季節ごとの草花が咲き乱れています。そんな庭内を見渡していると必ずと言っていいほど、石灯籠が視界に入ってくると思います。現在庭園内には20基を超える石灯籠が設置されており、形も大きさも様々です。石灯籠は照明器具であると同時に、自然を意識した日本庭園にあって文字通りの人工物であり、庭園が人の手によって造られたことを端的に表現してくれています。ただ、その柔らかな曲線と苔むした姿は、今では木々の中にすっかりと溶け込んで、庭園の一部となっています。庭内を巡り、さまざまな石灯籠を探してみてください。

①前庭トイレ前 	②主人玄関前 	③市島春城像脇 	④水月庵脇 
⑤水月庵池前 	⑥南山亭・三重塔間 	⑦三重塔脇 	⑧會津八一碑脇 
⑨東屋・卍亭脇 	⑩松籟庵前 	⑪松籟庵内 	⑫茶寮脇 
⑬旧事務所脇 	⑭黒塀池脇 	⑮諸橋徹次碑脇 	⑯湖月閣跡地池前 
⑰静月園碑脇 	⑱湖月閣跡地脇（水月庵側） 	⑲奥土蔵脇 	⑳梅林内 

文明開化の明かりと暮らし ～市島邸ランプシェードの世界～

明治から大正の「明かり」の歴史 * 太字は新潟関係の記事

明治5	7月	新潟市内の街灯として石油ランプ275基が設置される。
明治11	3月25日	工部大学校(現・東京大学工学部)でアーク灯点灯(現在、「電気の日」とされる)。
明治11	8月29日	フランス博覧会情報 大祭は電灯・花火など華やか
明治13	8月24日	『新潟新聞』に重灯油ランプ広告掲載される
明治13		この頃、石油ランプの普及で行灯が姿を消してゆく。
明治15	6月3日	イギリスは全国の市街に電灯設置を決定
明治15	11月9日	大倉喜八郎、銀座に電灯を設置
明治19	7月7日	東京電灯会社(大倉喜八郎ら)、本社移転広告(大倉組仮事務所→壺岸島)
明治20	1月18日	陸軍士官学校石油灯から電灯へ
明治20	6月18日	皇居の照明をガス灯から電灯に切り替え
明治20	7月31日	東京電灯会社注文急増、業務拡張へ
明治20	9月27日	大坂に電灯会社設立へ(同年、京都電灯会社設立、名古屋電灯会社設立認可)
明治20	11月23日	東京日本橋で電灯を街灯として設置
明治21	3月10日	鹿鳴館ガス灯から電灯へ
明治21	3月24日	吉原の電灯、申し込み少なく供給見合わせ(2月に設置決定するも、花魁の顔が青白く見えると不評。同年10月2日ようやく点灯)
明治23		『新潟新聞』に電灯広告掲載
明治27	2月13日	『東京朝日新聞』に新潟電灯会社設立計画の記事掲載される。
明治30	2月	新潟電灯会社設立
明治40	8月13日	新潟水電株式会社と新潟電灯会社が合併
明治42		新発田に電灯が導入される
明治44	4月	新潟市内にガス灯が本格導入される。
明治44	11月12日	新潟水力電気会社による水原町への送電開始
大正2	1月14日	『東京朝日新聞』に「眼のためには電灯が1番良い」との記事掲載される。
大正4		天王地区に電灯が導入される
大正4～5		この頃、市島邸に電灯設備導入

〈参考文献〉

『読売新聞』(ヨミダス歴史館:新聞記事データベース)

『朝日新聞』(聞蔵IIビジュアル:新聞記事データベース)

『水原町編年史』、『豊浦町史』、『新潟県百年史』

■解説文作成 藤原秀之（早稲田大学図書館）

■展示設営 今野真理子（市島邸）、山田諭志（新発田市）、藤原秀之（早稲田大学図書館）

＜市島邸2017年度第2回企画展＞

文明開化の明かりと暮らし

～市島邸ランプシェードの世界～



企画展開催に合わせて下記のとおりイベントを開催します。詳しくは裏面をご覧ください。

■ギャラリートーク:9月30日(土) 午前の部 10:00～ / 午後の部 14:00

■市島邸ナイトツアー:11月19日(日) 17:00～

会期:2017.9.30(土)～11.30(木) 会場:市島邸(新発田市天王1563)

入館料:一般600円、団体(20名以上)540円 / 小中学生300円、団体250円

主催/新発田市 協力/早稲田大学図書館

お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

文明開化の明かりと暮らし

～市島邸ランプシェードの世界～

企画展開催に合わせて下記の関連イベントを開催いたします。是非ご参加下さい。

市島邸のあるここ天王の地に電灯がひかれたのは、今から約100年前の1915年（大正4）のことだと言われています。江戸時代の蠟燭や行灯から、明治になり石油ランプ、ガス灯、さらには電灯へと時代は移ってゆきます。

市島邸にはそんな時代の移り変わりを実感できる資料が多数残されています。庭には10数基の石灯籠が設置され、邸内には変わった形の電灯の笠（ランプシェード）があることに気づきます。これらのランプシェードはいずれも市島宗家9代・市島徳厚の時代から使われています。祖父・静月の時代に建てられ、父・湖月が発展させた市島邸に電気の明かりが灯ったのは、天王の地に電灯設備が設置されるようになった1915年頃だったと思われます。1917年に亡くなった徳厚の父・湖月の目に、電気の明かりはどれほどまぶしく輝いていたことでしょう。

皆さんも邸内を巡り、さまざまな「明かり」を探しながら、市島宗家歴代の思いに触れてみてください。

■ギャラリートーク

日時 9月30日(土)

午前の部 10:00～ / 午後の部 14:00

会場 市島邸

講師 藤原 秀之 氏 早稲田大学戸山図書館担当課長

入場料 大人600円(団体料金540円) / 小中学生300円(団体料金250円)

定員 各回とも20人(先着)

申込 新発田市観光振興課(0254-28-9960)

市島邸に残る資料の中から、人々の暮らしを照らしてきたさまざまな「明かり(照明器具)」にスポットをあて、その歴史をご紹介します。

■市島邸ナイトツアー

日時 11月19日(日) 17:00～

会場 市島邸

入場料 大人600円(団体料金540円) / 小中学生300円(団体料金250円)

定員 30人(先着)

申込 新発田市観光振興課(0254-28-9960)

普段見ることのできない夜の市島邸を巡り、ランプシェードに灯るやわらかな市島邸の明かりをお楽しみ下さい。

交通のご案内

- 車で：新発田駅・豊栄駅から 約15分
月岡駅・月岡温泉から 約 5分
日本海東北自動車道
聖籠・新発田ICから 約20分
駐車場：大型バス5台 普通自動車25台

